

論文内容の要旨

論文題目： 寓意としてのアレクサンドロス
——イスラーム古典期の信仰と歴史意識において

氏名： 山中由里子

ギリシア世界にとって 1 世紀半も脅威であったアケメネス王朝を倒し、わずか 10 年強の間にアジアにおける覇権の構造を覆したマケドニアの青年王、アレクサンドロス。彼の遠征の衝撃はギリシアからインドまでの人々の記憶に深く刻まれた。ヘレニズムの潮が引き、西アジアにおいて新たな権力・文化・信仰の波が押しは引いてゆくなかでアレクサンドロスは、その時々、その土地の思潮によって、英雄の如く讃えられ、神の如く敬われ、また悪魔の如く罵られた。アレクサンドロスをめぐる言説は、様々な歴史的コンテクストにおいて常に再生され続け、幾世代もの権力者、宗教家、思想家、詩人、作家たちにインスピレーションを与え続けたのであった。彼の強烈な個性と超人的な威力に、彼が征服した領土をさらに越えたほぼ地球全域の人々が、今なお惹きつけられ、そこに自らの信条、夢や野望、畏怖の念や権力意思を投影している。

アレクサンドロスの言動や性格については、大王の生前から既に流布していた様々な伝説的逸話があり、また彼の唐突な死に続く混乱期には諸々の派閥が

私利を図り情報操作をした。現存する歴史資料には、最も信憑性が高いとされるアリアノスの『遠征記』から、一般に「ウルガタ」（俗伝）と呼ばれる伝奇的要素がより強い史料があるが、現代の歴史家たちはこれらの資料から政治的なプロパガンダや伝説の層を取り除いた「史実」を抽出しようとしてきた。本論はむしろ「虚構」の部分に注目し、人々がアレクサンドロスという人物に何を見出し、何を投影し、彼にまつわる言説をいかに操作してきたのかを解明する。

分析の対象とするのは、イスラーム古典期のアラビア語・ペルシア語で書かれた様々な分野のテキストである。「イスラーム古典期」とは、西暦 7 世紀にアラビア半島にイスラームが興り、その信徒たちが軍事的、政治的な勢力を持ち西アジアを制覇してから、アッバース朝が終にモンゴル軍の侵攻により 1258 年に滅亡するまでの 6 世紀ほどの間とする。

ギリシア・ローマ、エジプト、メソポタミアやペルシアにイスラーム以前から存在したアレクサンドロスに関する言説は語り継がれ、また翻訳されるなどして、その知識はイスラーム世界へと継承された。それらの言説は、現代の歴史家たちがより史実に近いと見做すアレクサンドロス伝ではなく、伝説的なアレクサンドロス伝であったが、その知識の主要な源泉は三つの系統に整理することができる。第 1 章では、歴史的事象と伝説の結びつきを示した上で、これらの伝説の形成と伝播の過程を追う。

第 2 章「預言者アレクサンドロス」では、まず『コーラン』に登場する ^{ズ・ル=カルナイン} 二本角とアレクサンドロス伝承の関連を解く。ユダヤ教徒に神の国を地上にもたらずメシアとされ、キリスト教徒にはイエス・キリストの先駆者と見做されるといったように、先行する一神教によってすでに神聖視されたアレクサンドロスを、イスラーム教は自らの宗教の擁護者、布教者、預言者「二本角」として受け入れた。その受容の過程とイスラーム教独自の解釈を明らかにする。さらに宗教・神学関係の著作にだけでなく歴史書や叙事詩においても、二本角との関連において神聖視されたアレクサンドロスに焦点を当てる。

第 3 章「歴史の中のアレクサンドロス」では、それぞれの時代の歴史家たち

がどの情報源を通してアレクサンドロスに関する知識を得たのか、彼らが古代史をどのように再構築し、そこにアレクサンドロスをどう位置づけたのか、という課題に迫る。イスラームの勃興から東方イスラーム世界にイラン系王朝が誕生するまでの歴史学の発展史を背景に、アレクサンドロスに関する歴史叙述を追うことによって、ムスリムの知識人たちがイスラーム以前の古代史をどのように認識していたのか、そしてその中でアレクサンドロスはどのような位置を占めていたのかということが解明される。

ムスリム知識人の信仰心と歴史意識におけるアレクサンドロスに論点を絞ったのは、宗教と歴史が政治権力と切っても切り離せない関係にあり、権力をめぐる言説においてこそ「アレクサンドロス」という記念碑的な存在の本質が最も顕著に現れ、そして効力を発することを論証することができると考えたからである。すでにイスラーム以前の文明や宗教が、共同体意識の高揚や教義の擁護のための強力な「駒」としてかかえてきたアレクサンドロスを、西アジアの新しい支配者となったムスリム共同体が、自らの存在意義の確立のためにいかに利用したか。本論が狙う所はそこにある。

イスラーム共同体の形成期に形作られた「二本角」のイメージは強烈な寓意、つまり歴史性をまったく排除した象徴としてのアレクサンドロスであるが、歴史学の発展にともなって、その時間軸上の存在は（現代の史学からみれば不正確ではあるものの）具体性をおびてくる。このようにアレクサンドロス伝を追うことによって、イスラーム世界における学問体系の発展史が明らかになる。しかし、アレクサンドロス自身は寓意から歴史的人物へという単純に移り変わるわけではなく、彼をめぐる言説には常に寓意性と歴史性が闘ぎ合い続けるのである。